

はじめに

患者さんの病態は複雑で、ラインがたくさんつながっている、モニターアラームも24時間鳴り止むことがない「ICU」という院内でも特殊でフシギな場所。そのICUで日々奮闘している「集中治療医 (Intensivist)」ってなんだかっこいいと思っているあなた。そんなあなたに少しでも集中治療の一步を踏み出してもらうため、ICUでも一般病棟でも役に立つ知識を埼玉県は彩の国ICU(さいたま赤十字病院 救命救急センター)よりお届けします。

当センター(救急医学科)は救急科専門医指定施設であるとともに、集中治療専門医研修施設でもあります。救命救急センター併設のclosed ICUで、3次救急外来で初療後に、同じメンバーで集中治療管理も継続して行います。

普段は夕方18時頃になるとレジデントや研修医が集まって、ICU患者の翌日の指示出しのために、朝カンファレンスとは別に夕カンファが始まります。朝カンファで決まり、その日に施行した処置や検査、全身状態についてディスカッションします。ホットラインが鳴るとカンファを中断して救急外来に行くため、場合によっては指示出しが24時をまわってしまうこともあります。いつもは仲のよい仲間ですが、このときはチーフレジデントなどが中心となって、徹底的に議論をします。本書では、この夕カンファの形式をとりながら、ICUで研修医が必ずぶつかる疑問について解説しています。

集中治療領域に関するエビデンスなどが載ったすばらしい教科書は散見されますが、実はICUでの医療はまだわかっていないことばかりです。本書の執筆にあたっては「教科書に載っていない、でも日頃気になっているアレ」をテーマにして、かゆい所にも手が届くように心がけました。いまだに結論が出ていないことも多いですが、治療を進めるためには誰かがmaking decisionをしなければなりません。そのためにも皆でカンファをくり返して、議論することが必要なのです。この議論をふまえての決断力・実行力の高さが私たちのstrong pointの1つです。本書でそうした議論の一端も知っていただければ幸いです。

本書は雑誌「レジデントノート」での連載に加えて、伝えきれなかった項目や新しい項目を大幅に追記してボリュームアップしています。本書を手にとって、レジでお金をちゃんと払い、日頃の忙しい合間にちょっとだけ読んで、少しだけでもお役に立てていただけたら著者としては幸いです。また、ほかの人にも勧めていただけたらもっと幸いです。

最後に執筆の機会を与えてくださり、終始励ましのお言葉をいただいた羊土社編集部の方、保坂早苗氏、小野寺真紀氏ならびにスタッフの皆様に心よりお礼申し上げます。

2013年1月

ICU 横の医局にて当直明けの朝日を眺めながら

さいたま赤十字病院 救命救急センター・救急医学科

早川 桂, 清水敬樹